

Table of Contents

I. はじめに

II. 金剛山の語源

III. 曇無竭菩薩の由来

IV. 檜巖の由来

V. おわりに

II. 金剛山の語源



宝物 高麗太祖 曇無竭菩薩礼拝図

曇無竭(曇無竭)菩薩はサンスクリット語でDharmodgata Bodhisattvaといい、法盛・法勇・法上・法起などと意識される。八千頌系統と二万五千頌系統の般若経の最終章に、常啼菩薩(Sadāprarudita Bodhisattva、常悲、普慈菩薩とも呼ばれる)の物語がある。

これは『大般若経』では第一会の最後に移されているが、説話のない般若経の中で注目される事実である。

彼は昔、一心に般若波羅蜜を求めていた。

空中から「東へ行って探せ。そうすればその教えを得られるだろう」という声が聞こえた。

そのまま行ってみたが、何もなかった。

彼は思い悩んで泣き叫び、いっそう強烈に求めると、空中に仏の姿が現れ「はるか東に香城(香城、Gandhavatī)という都城がある。

そこは七種の宝で飾られ、黄金で覆われ、宝の木が立ち並んでいる。

池には蓮の花が咲き誇り、人々に悩みのない所である

。この都城の中央に曇無竭菩薩の樂園がある。そこで菩薩は多くの女官たちとともに楽しみながら、般若波羅蜜の教えを説いている。

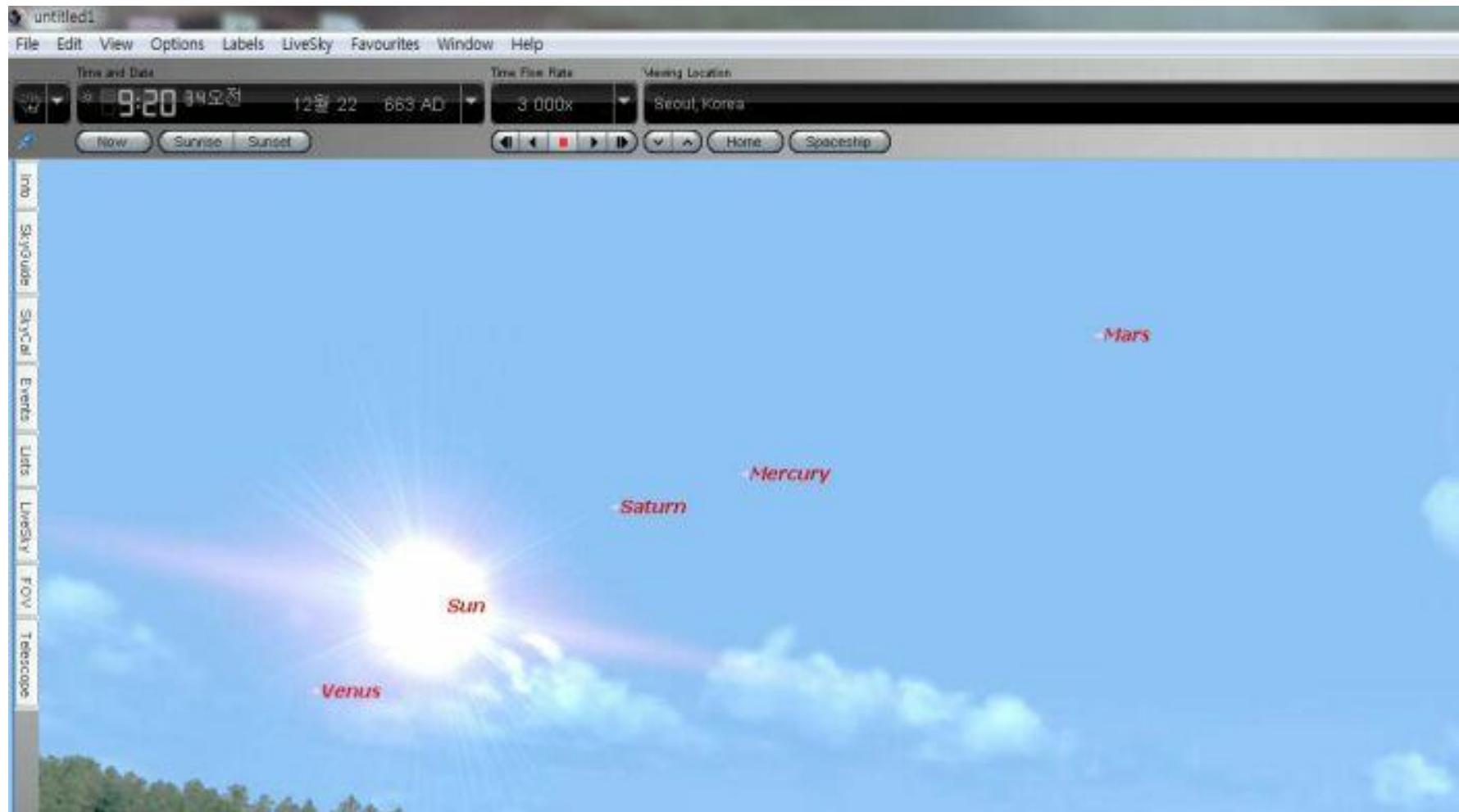
だからお前はその地を訪ね行きなさい」と教えた。

静谷正雄・勝呂信静、文乙植訳『大乘仏教3巻 初期大乘経典』(幸福な世界、2013)、p.42-43)

II. 金剛山の語源

年代	人物	内容
661	義湘	661年から670年までの9年間、唐に留学。義湘は唐の対新羅戦争の情報を入手して直ちに帰国し、護国仏教を興した代表的な護国仏教僧侶、
697~700	華嚴三祖 賢首法蔵	義湘と同期であり、賢首法蔵は中国華嚴宗の第三祖。義湘に送った法蔵の書簡とともに、法蔵は義湘に六十華嚴の注釈書である『華嚴経探玄記(華嚴経探玄記)』二巻を未完のまま送り、検討を求めた。唯識華嚴と中観華嚴の統合(崔致遠の記録)
787	澄観	唐の徳宗貞元(貞元)三年、賢首の華嚴宗統を継いだ。東海の東の近くに山があり、名を金剛という。全体が金ではないが、上下四方の周囲ないし山間を流れる水中の砂の中にすべて金があるため、遠くから望むと全体が金であると言う。また海東人(海東人)が古くから伝えるところによれば、この山にはときおり聖人が出現するという。

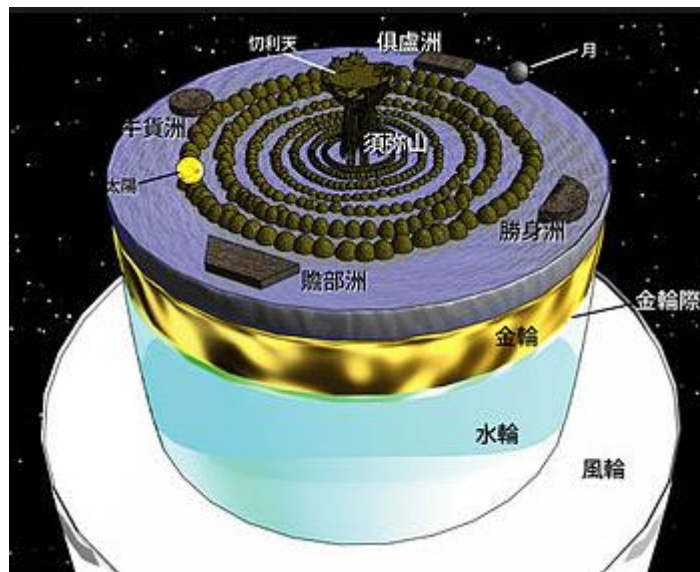
II. 金剛山の語源



663年冬至、百濟滅亡時の天と、1980年ぶりの四甲子

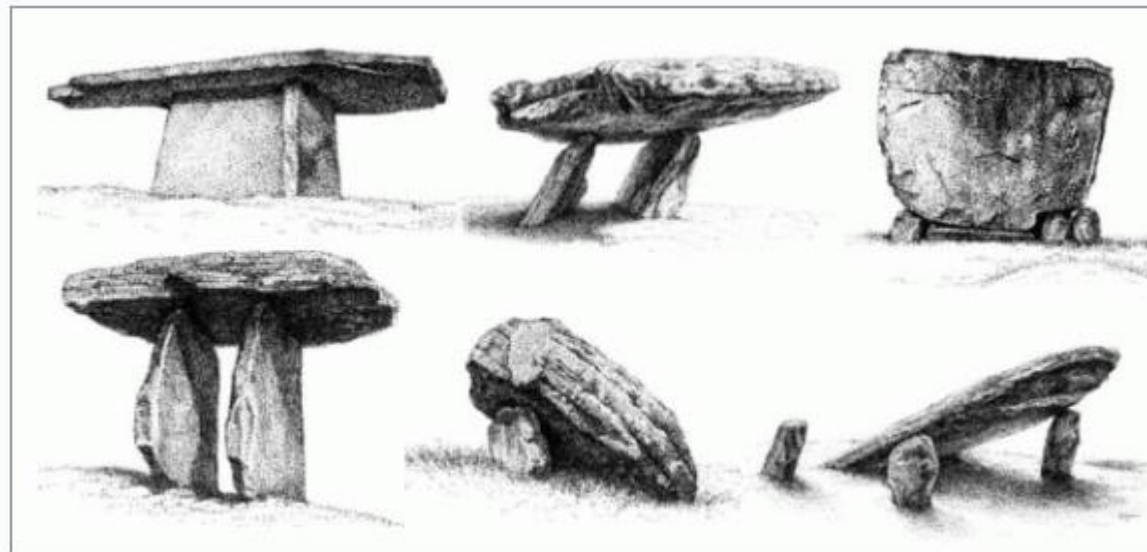
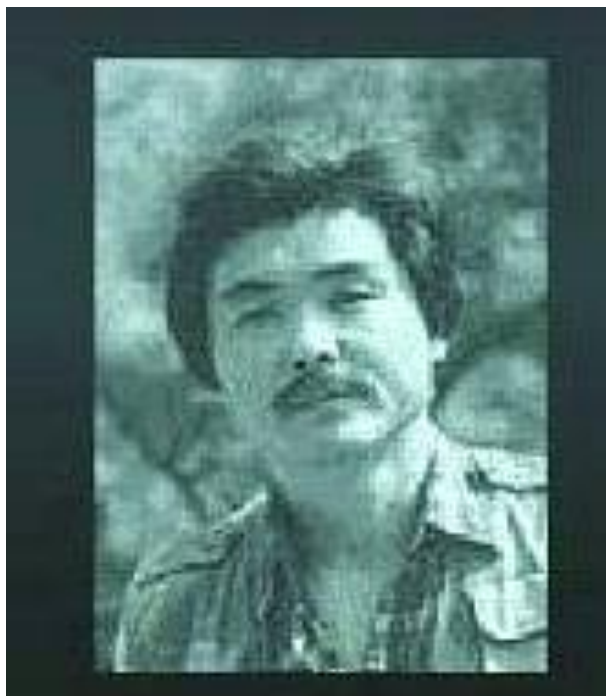
II. 金剛山の語源

金剛山=須弥山、華嚴經出現の理由:シャカ族——スキタイの後裔
釈迦族は自らを太陽の後裔と称した



九山八海=天龍八部
三千大千世界、九番目の山、三神
山
過去仏の修行地

II. 金剛山の語源



답사후 그린 고인돌그림(서양화가 변광현)

변광현(邊光賢) : 1956년 서울생, 숭문고교, 서울대학교 및 대학원, 런던 세인트마틴 미술대학 출신
동대학교 교수역임.

화가. 고인돌 및 상고사 연구가. 2005년 기관원 내사후 의문의 별세.

<http://myhome.shinbiro.com/~kbyon/>